



洋学文庫  
文庫8  
C 214





日本山海名産圖會卷之五

○ 目錄

○ 備前水母

○ 近江石灰

并美濃

○ 伊萬里陶器

○ 越後織布

○ 松前膾脰

昆布

胡挾笳

○ 唐船入津

菩薩揚

○ 阿蘭陀船

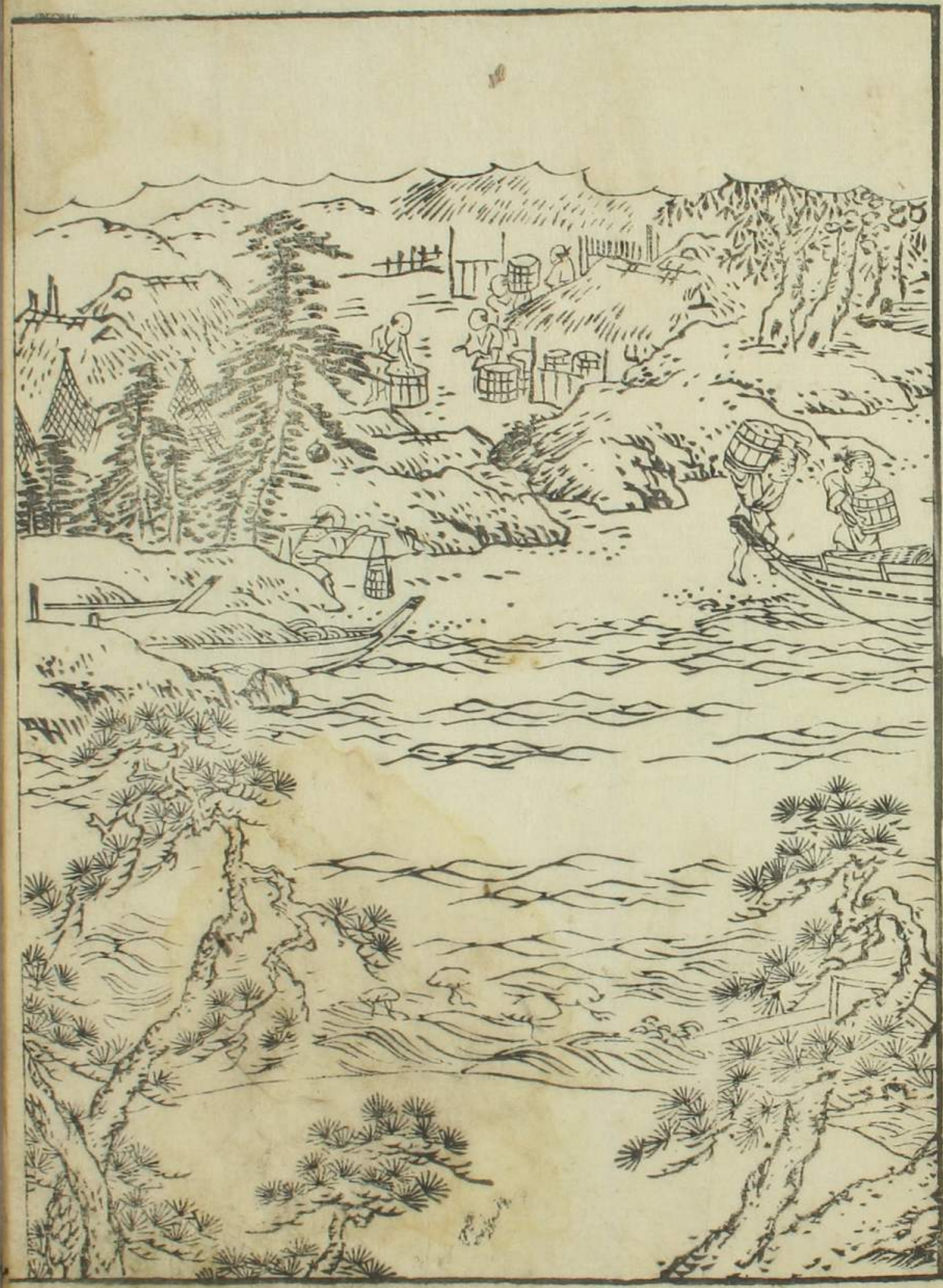


○水母

一名 借眼公 海苔

諸品に産して備前殊に名産といふ又唐水母朝鮮水母といふ肥前も産といふ異國より長崎へ傳送せし物もさばかく号り今の本朝も其法と覺えし製法同く唐水母を採り其製法ハ石灰と明礬とを浸し晒して血汁をとり色変じて潔白なり又備前ハ櫛の葉と少く炙り白くして春に塩をとり和し浸しとる其外數種あり中にも水母又色黒き物赤きものハ皆毒ありと云ふ人これと採事あり

○形ハ蓮の葉と覆いたるが如く其邊は足の如き物なり色々紅紫とて眼もほもたう腋の下より糸のごとく繁れ長身く物なり魚蛸かららば是は隨附を俗にこれが眼と借事して淋病をいひたり故に借眼公の名あり○たろろのものを盤のごとく小なる物の盆のごとく



水<sup>みづ</sup>備<sup>び</sup>  
母<sup>ぼ</sup>爺<sup>や</sup>



五ノ一

其味淡く薑醋らどよねわけて食と大抵泥海の産として筑前備前等より多く江東より鮮し〇是と採るより九月十月の以海上より漂ひて流ると舟より攪網と以て採る波荒き時ハ破へうちあぐふもけりなり

夫木抄源仲正

我々の海の月とぞ待とるくらげの骨より入世うやと

〇石灰

一名 漆灰 散灰 聖石

今近江の物上品と云美濃又是も等し是金気なき地なれども元ハ和加野高原に焼初て其年月未詳といふも本朝用いしことふこと甚古し桓武天皇大内裏御造惣清涼殿御座の傍に石灰櫃と塗作らせたまひて天子親四方拜とどの土席と云其外人用よ多益とらることも多し先億萬の舟楫億萬の垣牆九水と載るの物溝瀝器物に至るまで是よとぞれ成らんと實は天下の至寶なり

諺に都なをを郊百里の内外土中かななりとこの石を生じし

〇今江加伊吹山近邊又石部に焼物皆青石なり山加鞍馬に焼物の夜色石とて青石より方より青白なるハ是も次一石ハ必土内より掩ふるに二三尺と掘取りけりて風霧と見え物ハ取らば伊吹山の麓更地山一面の青石なり島筋に物ハ下品と云掘出し矢とのつゝ打破し手携轉木を以て二百間斗の山と磨落せば凡碎けて地よ付くらざれば物なりとせばやぶ川を船とて渡せり

礪礫と焼くりの石灰よ分れて

燔法ハ

窯の高と三尺廣と周経四間計田土とて割る下よ

風の通らる穴けり先石成尚歩碎とて程よく満し免其上へ炭をを炭と取出して幾度もとろり又美濃とて焼く窯の万ハ異なり槽窓といひて高一丈周経三尺斗内ハ下程次第又細く三角よはて



石の近  
灰と江



燒きろり灰と自然と底よ落らんが為なり石と炭とを交えて幾く  
重し積重下より燒きて火氣と登せ底よりささく燔きふと横  
の穴より掻出せりかくては赤い石と炭とを上へ積添て燔初むる  
より凡百日本の間晝夜絶る事なり是中華の方の如くを夏  
冬ハ燔となく燔とて二十日許風中よおけば熱く蒸せて自然  
吹化して粉となる又多よ用る者ハ水ととくげハ忽ち解散とま  
かきども風化の物とよくしてはどをたう俵よ籠めて風の如く  
ろろよたえと尚野へ置けば次第よ目も重く灰も自然よ倍よはどめ  
ゆるるも俵も後よハ張切る許とハなれり是とフケルとよかくて二年  
ほどと越えくかろるぐよ市中へ送り出せりさてかくたりて  
後ハたよ水を忌めりめろを洗けハ忽ち燃出ていんともさつこの  
なり故よ舟中よ是と專と守り又牛よ負よせて出るよ若雨よこの  
ひくた出て牛と損をと恐れ常よ牛御の腰よ鎌とさく後とる

繩とよとやく切解の用意と  
○蠣灰 蠣房の下の蠣の条下よいへるがごとく年々よこの物の  
ちと敷く崎嶇として山形のごとこのものもわり海邊の人の別よ鑿金と  
植と成持して足を濡して是と採ると燔き用也  
大坂るごよ用るもの多しハ灰として石灰とくなく灰屋  
招牌よ本石灰と記しゆる物の近江の物とさせり燔方石灰よかろる  
車なり但し蛤蜊と燔とるに至る下品なり  
○灰用方 舟の縫合せの目と圍とをろよ桐の油魚の油よ厚とこ  
狗細き羅と調へ和して杵く事許とて用也 ○又燻石燻とにハ  
先篩ふて石塊と去り水よ調へ粘合せ油をかへ○壁を塗るよハ帛  
糸切と加へ○水と懸り池るよハ灰一分よ河内黄土二分土塊と備へて  
あま和し粘合せて造るよ堅固よして水漬壞せどは余澱を造り又  
紙とと遠くも加え用らる尚其用枚速登りらば



美石 濃灰  
 櫓窯

近江石  
 灰窯



○陶器

諸刃數品有中いぜんのみまも肥前國伊萬里燒いぜんのみまと云と本朝才ほんしやうさいと云と比叢山ひしやうざん凡十八ヶ所と上場じやうじやうと云

○大河内山 ○三河内山 ○和泉山 ○上幸平 ○本幸平

○大樽 ○中樽 ○白川 ○稗古場 ○赤繪町

○中野原 ○岩屋 ○長原 ○南河原上下二所

○外尾 ○黒羊田 ○廣瀬 ○一の瀬 ○應法山

等よては内大河内ハ鍋島の御用山三河内ハ平戸の御用山こしやうざんて他たの貨賣かばいと云と車くるまと禁いんと伊萬里ハ商人の幅漆はくしきせる津よて焼やき

造るの場ばハいづらば凡松浦郡有田のうちうて其内そのうち中尾なかつお三ツ股みつまた

稗古場ハ同國の領ちりやうちと云又廣瀬ひろせと云の青磁物せいじもの多くして上品じやうひん也

都合二十四五所じやうごうにじゅうよんごといふれも十八ヶ所ハ泉山の協きやくにありて是土こゝろの出る山やま也

○亞土

泉山いづみやまよ出て國中こくちゆうの名産なみやん本朝他山ほんしやうたよ比類ひるいる中ちゆう華

ハ中國ちゆうごくの五六處ごも出でせり是土こゝろよして土つちよいづらば石いしよして石いしり

づらば其性そのせい甚堅硬しんけんごう一奉けん數釜すうかと云とちかき金杵きんぢの流水りゆうすい碓すいの

是と眷けんむ五六寸長ご二回半にかいはん杵ぢの幅はち一尺半いちせちはん厚あつ一尺いちせち最水勢さいすいせいはよくちけて碓すいの數かず

多く連つられり未ま粉こなと云とちかき又他またの土つちの案あん軟なるると二三にさん段だん

和わ合あせて家いえの内うちの溜池るいぢハ漂ひ度たく拌通はんつうよく和わたるを飯い

籬かきハ澆や又また外の溜池るいぢハ移うつりて澄すみ其上そのうへハ浮うるものと細料さいりやう

と中ちゆうと普通ふつうの上品じやうひんよ用もちひ底そこよ下くだ沉しんたるハ取捨とりすてて不用もちひと其

ろ干ひの土つちと素燒すやき窯くまの脊せハ塗附ぬりつけ内の火力かひりを借りて吸乾すいせんる最もつ

これよよと夜よを候まちいそと搥かき落おち重おもて清せいるハ調和てうわハかの團だん子ご

のごと粘和ねんわして工人こうじんよ造つくるは是こゝろよ婦人ふじんの亦また為ななり

○造次そうさい瓦わ坯ひ器き 凡たゞ次さい瓦わ坯ひと造つくるハ兩種にしゆあり一ひとハ印器いんきと云方圓はうえん數

品ひん瓶びん 甕つた 爐ろ合あの類るい 屣げん風ふう 燭しやく基きの類るいも及およぶ是等こゝろハ凡たゞを壘るい

肥前伊萬利陶器



同打と園か書画



同素焼  
窯  
同過  
銹

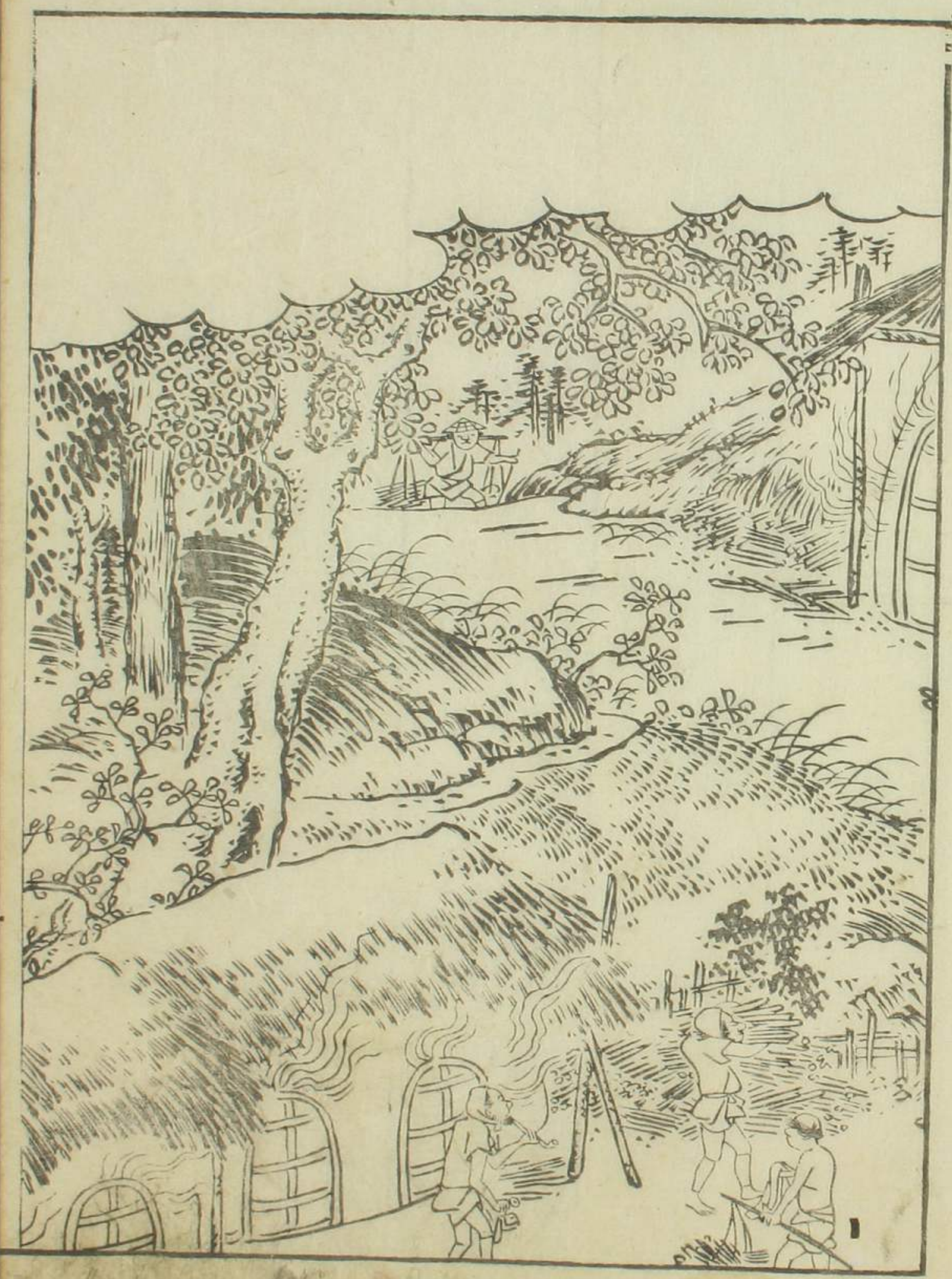


成して或ハ面は破り或ハ面は截り又再び白泥と埴アッて範は摸し或  
ハそのまじり印を押しとり又おうし土は銹水と和して塗  
合取付たむしとるなり○一ハ圓器といひて凡ハ小億萬の杯盤ハ  
人間日用乃物として其數と造る車十ニ九なりハ圓器と造るハ  
先陶車と製と其圓盤上下二ツとして下の物少ク大なり真中ハ  
真木一板を堅く埋む車三尺許高さ二尺許上の車の真中ハ土を  
置て造る下の車ハ工人の足として廻し須臾も廻し止まらば  
と以てかの上の土を上へ押捧げ指自ら内ハ又又車ハ旋轉が中  
柵指ハ器の底より作りて其形の異法心はまきせとて手はうち指  
尖の妙工見ふがらら其數と造り其様千萬の數も一軌の内ハ  
出るがごとくにして大小とちやまらば又梳鉢の類の外ハ輪臺と付る  
ハハ微し乾して再び車に上せ小刀とて輪臺の内外と削り成し碎  
缺しハ時ハ補ひ或ハ鈕手瓶の水口をハ別ハ造り粘土を合せて

和付と又是と陰乾し極白に至らしめ素焼窯へ入るなり  
○素焼窯ハ圖とて之を梳室の如く物とて器物と内ハ積とかと  
ぬ火門一方より作りて薪と用も度量と候ハ火と消し其まに能く  
す

○打圈書画再入窯 右素焼のよく冷めると取出し一度水は

洗ひ毛綿列衣として中を磨らり茶椀鉢などの内外上下の圈輪乃  
節と画くハ又車に上せ筆と其所より作りてはまをめぐらせり後  
して書画と施し其上ハ銹漿と二度過てよく乾し本窯へ納めさく  
焼けば火と出て後画自ら顯る取出し又水は洗ふと全備とてとく土と  
取るよりハはしめて終成ゆてハハ一杯の小皿なりとてつと其工力を  
過ること七十二度して其微細節目尚其數三盡とべうらば  
○素焼の窯ハ家の内より本窯ハ斜阜山園の上ハ造りて必平地ハ  
ハナリ皆一窯完一級高くハ内の廣さ凡三十坪是と六つも連接し



同 松 木 窯



て悉く其接目は火気の通じろ窓を開く然れども火は空をこぼれ焚こ  
内は器物とのとら基はり即ちして制し一つ宛のせて寸隙なく一方と  
細長く明置るんへ新と入るは火門八寸は高二尺計余りて焚くと凡  
晝夜三四日して一室を薪九二萬本と費やとを焚様は手練りして  
上人下人の雇賃は論む 追て投ぬた本物の重さ 又石の服は手鞠程  
の宥有是成時と蓋ととて度量と候は其成熱と見まは火と消し  
其まより冷して取出ると一室の物凡百俵に及ぶ

○過錆ハ即ち土の内を上澄の上品とるりそれは蚊子の皮いと  
焼くろ灰と調和を最増減加味家々の法りて一概ならず

○回青ハ 元漢渡の物りてその名未詳是亦よく細末して水と  
和し晝く時ハ其色真皂なれども火と出て後青碧色と変じ  
天工開物と見ると是惣く一味の無名異なりは無名異といふハ山よ  
て炭とくく焼く下は異色の塊生と是と藥木膠とを是と

無名異の名りり又石切銀山も同名の物りり本条は物にいら  
ど是は土中より紫色色の粉と水干したる物とて血止と候なり  
最も偽物多く本条の無名異ハ地面は浮生して土よりいせに  
掘り三尺より五尺以上中下の品りりて色と辨は以上る物ハ  
火を出し翠毛色となり中なるもの微青なり元胎木物と  
上品といふ大なるハ僅一分計小は至く細は砂の比尚上品多  
○赤繪の物ハ錦様と云て五彩金銀と錆を施す是は一山の秘術  
としてに外と林示ど故に此は畧と是はかの硝子錆を用由とす  
○惣て南京焼の古器ハ其白垩成得る時なりや土ハ土器  
土は似く甚軟なり其上薬は硝子を加ふる由は自ら缺損は是  
と今虫喰出るど賞せられも用は適してハ今の物も力なり但  
回青繪の上錆ハ錆の上より虫なる如見あるハ南京物の妙といふ  
硝子薬の助なり日本乃青繪ハ薬の下は泥とらるが如くあるハ

織<sup>り</sup>越<sup>え</sup>  
布<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>



硝子を用ひざる故にして是又通用の爲に勝るなり  
○陶器の事ハ舊事記に茅渚縣に大陶祇と云らる茅渚ハ和泉の  
國に屬して今も陶器村に古ハ物と盛るものと云く土器又本の葉  
と用ひ今堂上と云く土器を用ひてるも塑たり是上古質朴の遺  
製と捨たまらぬ風儀と見るべし

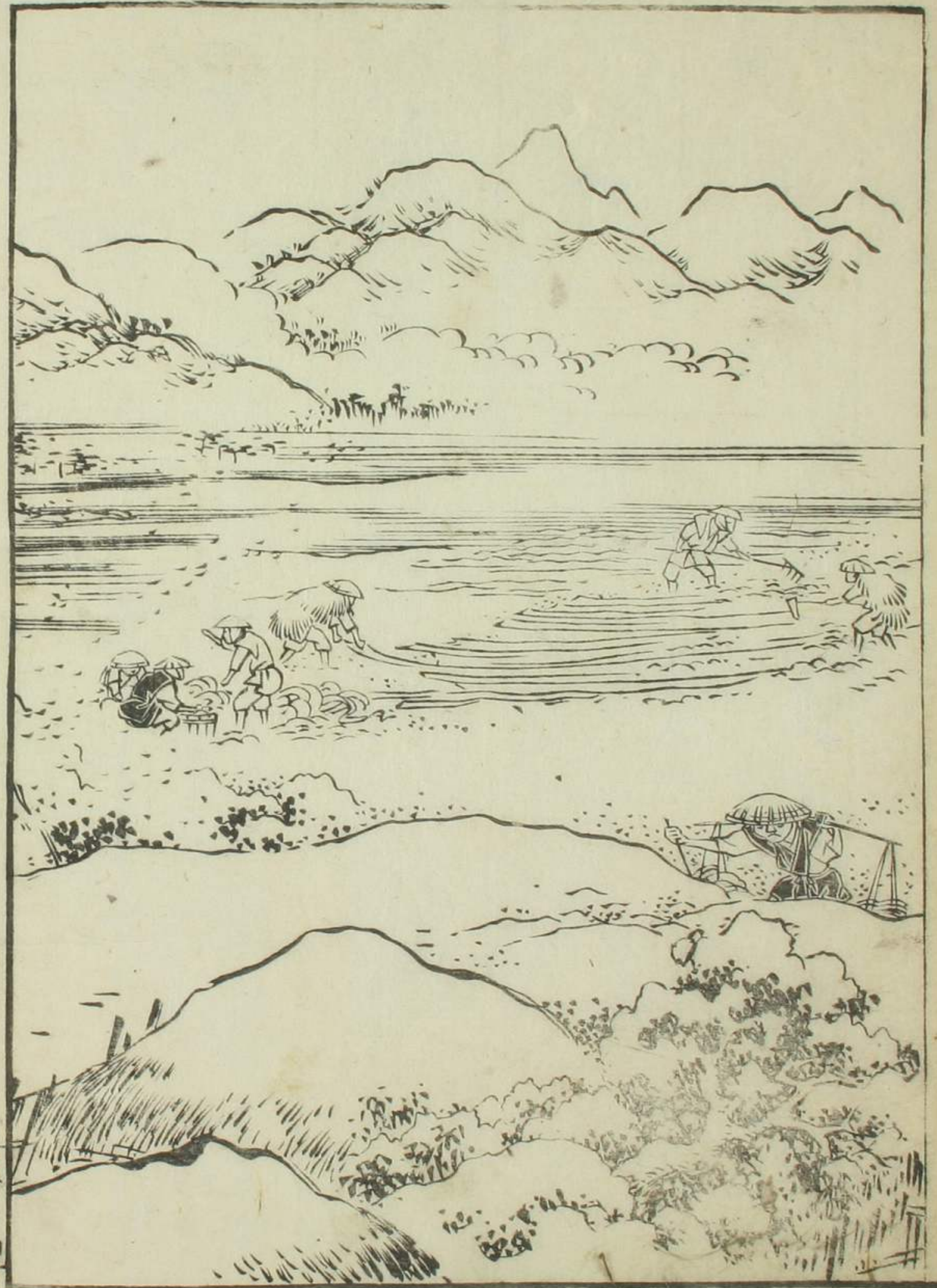
日本記神代卷に嚴瓦 嚴分瓦之置 忌免たなど皆神と祭るの土器也  
又和名鈔に缶とヒラカといひて斗と受るの酒器なりと云 斗ハ今の  
延喜式に盆分瓦と云も皆古質の器なり後世に軍陣の出門のこれ  
是と説くとイツへのヲキモノといふ也又今も忌部に古物ハ古語也  
是以て陶器と司る性もさう今の伊萬里に焼はくは年  
未詳

### ○織布

大和奈良越後近江など織出に車夥しく中も越後と名  
産とて越後縮と稱して苧麻れ生質よく紡績の精工なりと云是  
越後と織はくはくといふ未詳と云くも南都近江よりハ古し  
其於越後連接の國信濃と云くも武藏下総下野常陸など皆  
苧(苧麻)の多く生ぜし地なれば國の名もそれよりて号らる  
物下総上総信濃なり上総下総ハエフサの國といひて即ちフサ  
アサの轉語なり又麻と云くは東國の方言にて今も尚  
ちりり夷蝦人の帯と云くは本皮と作ると云も是なり信  
濃ハシナヌと云くもて專織出せし地なりと云く和名抄に信  
濃の國郡にシナと云くも石多より更科 是地なる穂科 干いたる地  
科 麻を納めり 仁科 煮て皮と利 又伊那郡のうらま 麻績  
更科郡に麻績たりの名なりて即ち麻と績する地なり 又  
神樂哥よ 本流伝るをたのるありや麻と績する地なりと云云又



雪 布 越 晒 後



延喜式内藏寮長門の國交易よきむら所常陸武藏下総麻  
の子是上石の食さる又大藏省春秋二季の祿布信濃布と以内侍司に充  
るも目々比皆是證とさるに足る故に越後の國ハ連接たること  
自ら後世此も移せたるごとく常陸ハ倭文として島模様など織出  
したる名なりといふ

○越後の國ハ十月はより三月までハ雪家と埋めて大道の往來ハ屋  
の棟より高故に家の宇と深く此を是以往來ともて家向  
ハ一通ハ雪の多く鷹木と付て上下はされハ山野谷中とて草  
葉樹梢ハ隠耕他の便を失ハ男女老少となく織布と業を  
こころて實貝の國中天資の富なり○今柏崎とてハ海邊よりて  
布商人の幅濶ハ小千谷ハ畧隔て亦商人有是信濃原よりちり  
苧麻と種る地ハ今下谷の邊より多く千手と云所ハかこり島上織  
の場として塩澤町ハ緝かこり十日町ハかこり島堀の内ハ白猪

と専とハ一村ハ一品の島模様との織アて他品と混ぜば問屋  
是と取合せて諸國ハ貨賣と

○苧麻種植并漂染織の事  
苧麻ハ土とて生ぜりり  
か撒子分頭の両法より色も青黄の両様より毎歲兩度刈  
物より然もどし土よりて同種のりめも其性の強弱有既ハ近江  
も種る物其性柔滑なり東國寒地の物ハ至て強故に越後其性  
のこもしはらば都は遠くて人性も質素なれば工巧最精

○大麻ハ楓葉の如く苧麻ハ桐の葉に似く大は異なり苧麻ハ生  
て皮を剥ぎ大麻ハ煮ゴキとて煮て剥なり大麻ハ雄ハ花よりサ  
クラアサと云雌ハ花なく實より是種とて時ハ自ら交りて生じ  
即雌雄なり苧麻ハカラムシと云ひて苗高五尺許五月八日ハ刈其  
跡と林とそおけハ来年肥大なりとて是奈良とていひく南都  
は織物是なり越後最苧麻なり種類山野より多し○凡苧の皮

剝取して後若雨よりつゞき府燼たる故に晴天と見え窮むるよりつゞき  
もハ折らばされども草と破折の時水と以て停し是亦其刻詩より  
久しくくひひと色ハ淡黄なるを漂工屋是と晒して白色に  
るより先稻灰と石灰とを以てあをを加へ煮て又流き入るてうらび  
晒らる

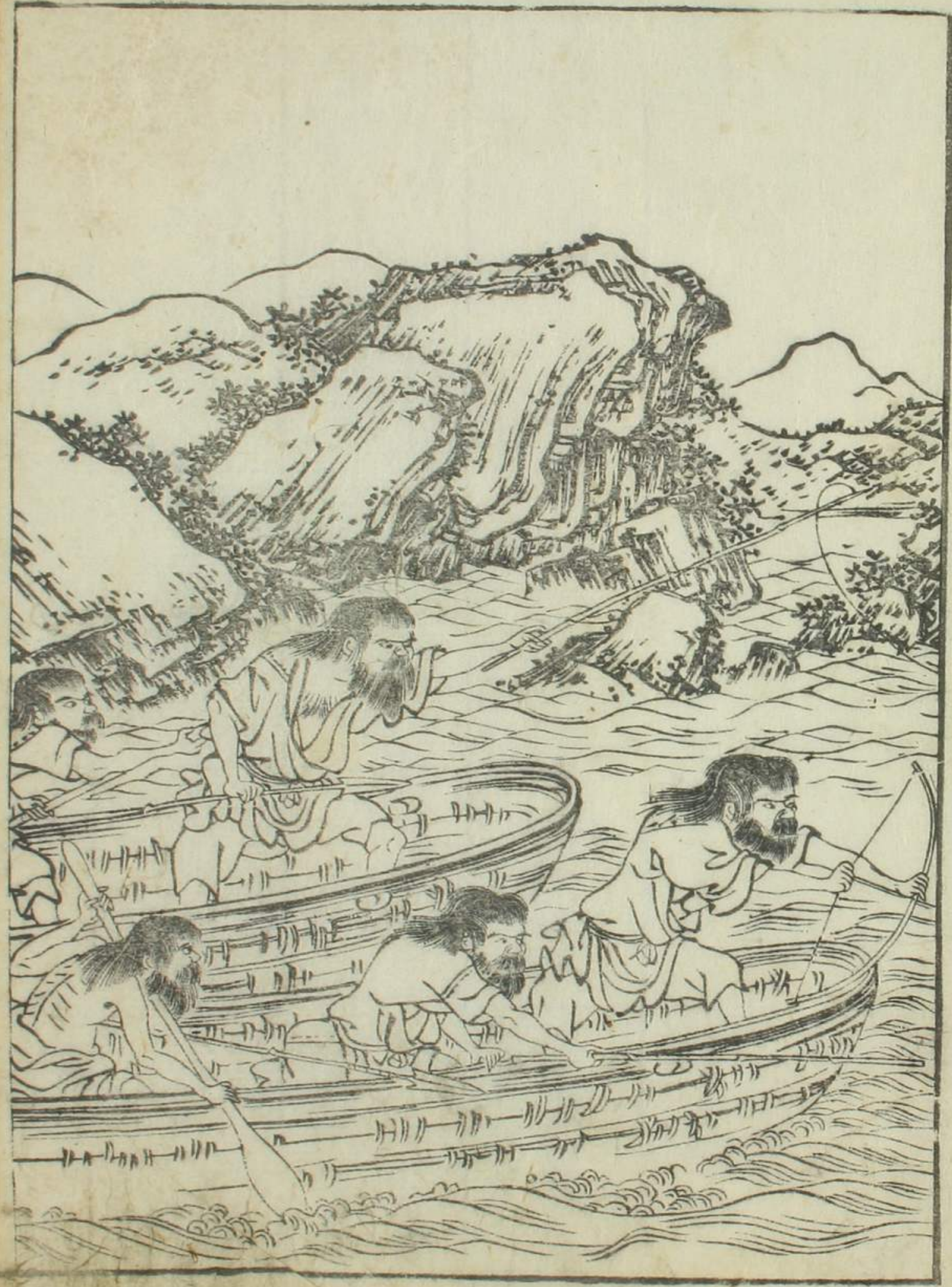
○糸以紡るより上手の者ハ肺車と用由是女一人のみ力ハ三倍其  
うち性より物と撰りて細く破きて織るなり粗きハ糾合せて繩  
或ハ縫線の糸と云

是皆婦人の手力專らして男相交さる故に國俗女と産するごとく喜  
ぶりそれの中ハ二歳三歳の時指の爪を候ハ細手粗手の生質を候ハ  
若細手の生れ付なれば國中よりつゞきて是と云む

○糸以染る事京都の志と云にからるごとく島類ハ織上と宿水  
は揉洗らひ陰乾らば白布ハ織りて後は晒らると長次晒らるとハ彼灰汁

揉洗らひ事三五度して又降積する雪ハ敷なると  
其上ハ亦雪と積らせ又其上ハなると幾重といふとなく高  
堤と筑する如く日のつゞりて自然と消ゆると云ふ至て白  
なりと又云はよく揉洗らふ

○一説云布商人習俗の俚言ハ布の精粗上下の品と見  
るは一合と言と極細の布と二合三合是より次第に粗  
是山中より織布なり一合ハ山の頂上よりして人質も甚素  
朴なり故に衣食住の費一年の入用妻子は給と取らる  
五六十目許りて細布一端の料の紡績ハ事足と甚やと  
せば一から成る至細の物ハ山の一合よりしてそれより二合三  
合と次第より粗なること今ハ世車の後急より見  
るよりこれより依てねりハ當世の器物諸藝萬端精良昔に  
劣ることは二合三合より等



蝦夷人  
 捕膾膾



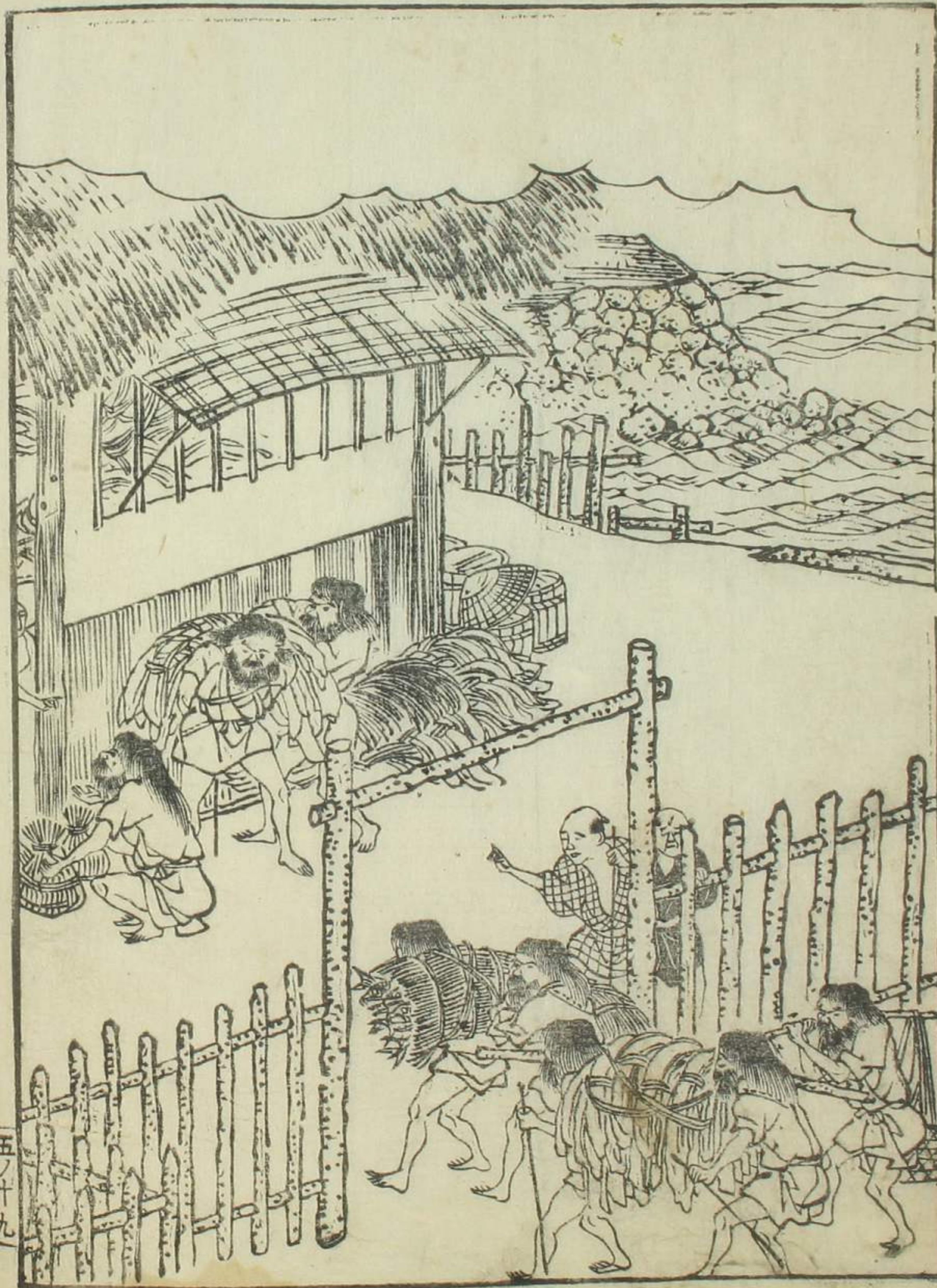
○ 膾炙獸

是松前の産物と云ふも蝦夷地ヲシヤと云ふ取て採るなり  
寒中三十日より二月乃至ぶとれども春の物ハ塩の利ヲ以て  
貢献必寒中の物と云ふと云ふ蝦夷地ニ運上屋といひて松前より  
七八十里東北より最舟路其遠と七八百里もつとつりは運  
上屋ハ松前奥加近江など其外商人の出店つりて先松前より有  
司下其交易と校監と日本より渡す物ハ米塩麵古手たむと器  
物等とて又物ハたり又蝦夷の産ハ海狗 膾炙 熊 同膾炙 鹿  
の皮 鱧 鮭 昆布 鮑 鱒 ニニニ 數の子 等たり  
其内蝦夷錦ハ滿加 韃靼の産とて蝦夷地ソウヤと云ふ  
持渡る又熊ハ先子と云ふ取て其翌月親と捕まり子ハ婦人  
の乳ニ養ひ齒の生ふる至アと雜物を食せし免成長の後材

本ヲて志めこぼるる状とらに薦よのせ酒肉と具へるなり後  
膾炙と取て肉と食ふ

○ 膾炙獸とラツトセイとのハ誤なり獸の名ハラツトツなり  
或書ニ膾炙臍とかさる外腎の事にして罌丸なり藥用是と要  
として肉の論ハさるる故ニ陸莖といひて仕賣とる物ハ外腎の  
間違なり津輕南部より出て真偽甚紛ハ是種類有る故  
たり海獺海狗一名とはとれども是種類の惣名なり其余海狗  
と云有是以和語ニアサラフと云皮ニ黒珥点有て膾炙似たり  
葦鹿の周種なるべし○海獺ハ海のカヲツとて是全く形狀膾炙  
ニ相似たり是と別ハ前の齒二重ニ生ふる物真の膾炙と云又  
一説ハ二重齒ハ一齒許なりといひ又頭上ニ塩と云く一穴有  
毛ニかくと見えたり肉とて百ヒロクとも寒水の内ニ投して  
其水温煖よりて氷ざり物真の膾炙と知るべし

同  
上  
運  
屋



○陸莖とつゞきも偽物有て百ヒロと以て造るとり故も毛わし  
号て百ヒロタケリと云真なる物ハ三寸許赤色よして本よ毛わし全  
身灰黒水瀬よれたるくもて微く長く顔ハ猫よ似て小く口の吻  
鬚甚だまき一思の次は左右は足有大鰭のて後足は尾前よ有  
てとも長さ一尺許其尖は五ツの爪わし尾ハ細く海底最も深所よ  
棲又ハ海邊石上よ躑躅と或ハ群となつて寐なると流る其内一足睡  
どして候ひ若舩来ると忽ち聲をあげて睡とさませ水中に隠  
水と行く時ハ半身と水上よ出して能く遊ばせ切ると最盛なり  
海獺もとく右よつゞき今膾膈といひて来る物多くは海獺よ  
て其真ハ得ごとく南部一粒金丹も是とあらうを才一といひつゞり  
本草集解は東海水中よ出ると記せしハ是中華も稀うて昂  
日本より渡るとい見えたり ○蝦夷よ大と子ツラ中成チヨキ  
小とウ子ウと云是真の膾膈なり鰭とテツヒと云一足と一羽と

云津輕とてはテツヒと採てサカナと其の中よ大なるとトとい  
つ今女児の言よ奥依とてト、と云ハ若や是より言来ぬるも  
まづつゞきと中華つゞき言つゞり  
又夫木集雜十八夢の題は建長八年百首歌合夜笠内大臣  
我意ハ海驢の寢なれと云やらぬ夢やうなうと汝やと云ん  
と詠とつゞらハ海馬の種類よて別なり又海驢乃文字と日本記神代  
卷龍宮の章よと千の皮とも訓ア  
○捕獵 蝦夷人足と捕ふ繩よてからとらふ舟よ乗つてかの  
寢なぐれの群と見えハ狐の尾を以てうりてかの起番の一羽よ見  
まばたよ恐れ聲をたてて去ると待ちて寝たる取とら或ハヤス  
たごころと採ると其手練他の乃取よつゞき舟ハとととと掉とと事  
う前後ハ漕ぐなり

○或云膾膈とい膈なぐし釣るに外賢と云如何或書に彼様

を得と欲して松前南部の人よ不見むとも免角して得がこし  
比土人の謂と聞けハ臍と陰莖と甚と通一故陰莖と取る時  
必臍と損じて全くなく或人云是雄なり其雌ハ必臍よりん

○昆布 和名 ヒロメ 一名 海布

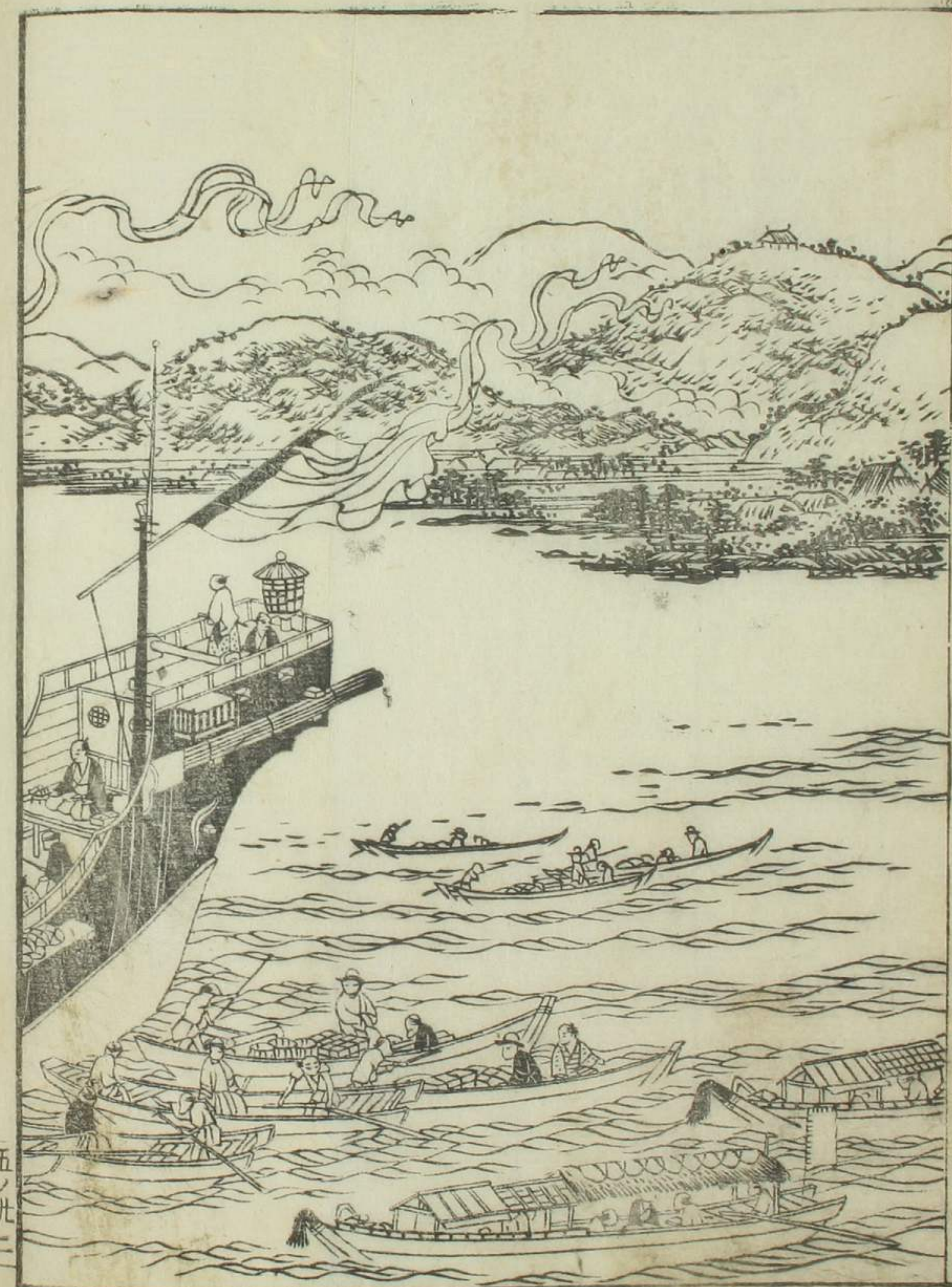
是ハ六月土用中よりて常採るを常とて同く蝦夷松前江刺箱館  
なととも採る小舟の乗る鎌を持ち水中に暫くついで昆布と  
抱是より浮び皆海底の石より生ひて長さ三四尺より十間許れ  
のつらそまぐくに石ともよつぐれども十日許りて根自ら  
離る長さより程切ると蝦夷松前の海濱の砂上家の上往來の  
道に至るまで一日乾くと實は錐と立ふの隙もなき暮は納めて  
小家に積む其上は庭と覆ふと一板よりて汝浮きとるを昆布  
と云 世俗は蝦夷の家ハ昆布とついで甚月と云ハ乾くとる  
と云とるやうに家ハ昆布とついで甚月と云ハ乾くとる

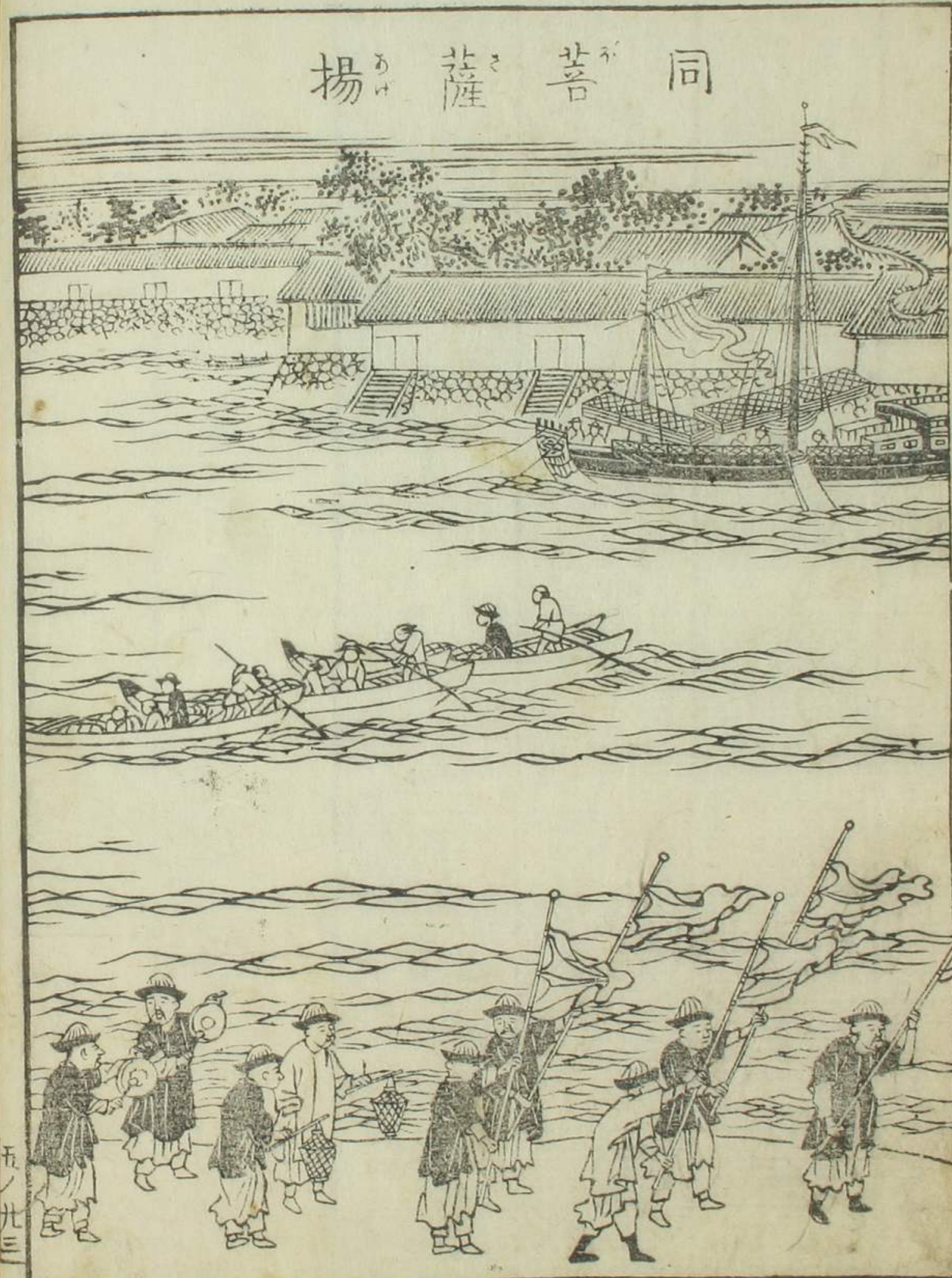
て僅く其階級をころり又ハ九月の比自然おつと奇せ昆布  
と云 ○昔ハ越前敦賀は傳送して若加は傳小濱の市人是  
と制して若狭昆布と號と若狭より京師は傳送して京師亦是  
攸制して京昆布と号し味最とも勝る

○右ハ皆俳諧行脚の人松前往來の話は傳へて實は  
見及びてこよハついで尚其蝦夷人の衣服などのこと  
は先才一ハ日本の古手と貴し富るるもの一郷の社宴  
ついで酒樽と積むる上よハかの日本の古よといくらもか  
さめて装飾と入り地の織物ハライヒヤウと云木の皮  
色黄うして紋有方言アツと云て甚身物なりえり  
粧ハ左よ合せシナの皮と帯と男女とも常は浴湯せは眉  
両眼の上よ一文字よ生ひ髪ハ勿論鬚髪とも切らさけ  
そい甚く長し食と付ハ箸洗友のみよ持ちて髪とつけて



入唐  
津船

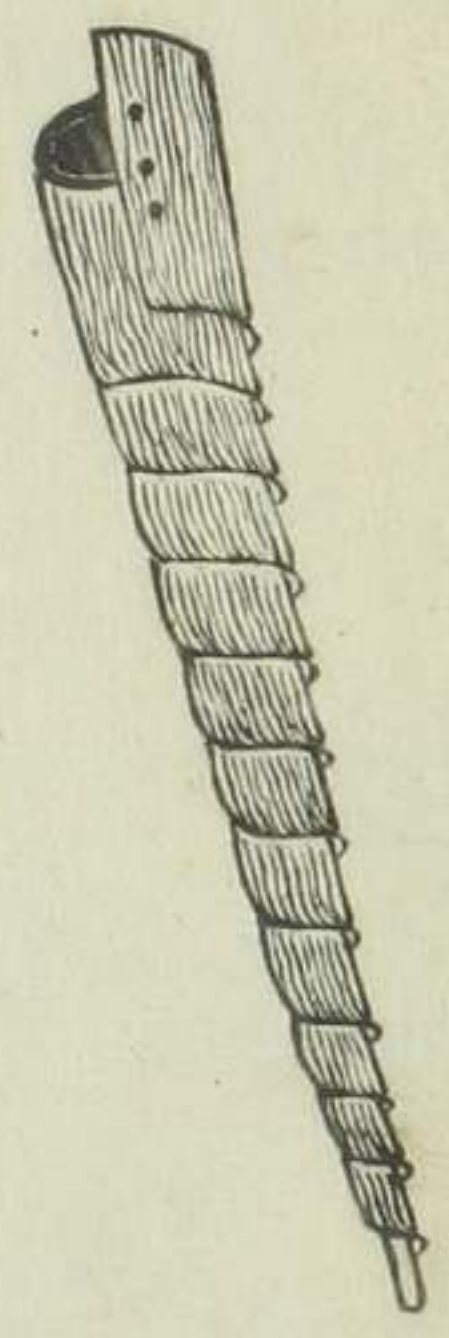




啜て飲む酒ハ行番の如き物も入る杯ハ飯椀と用也其椀皆  
巴の紋と付たり其故と知れば女人の皆唇に入墨して男女  
とも激ハ鼻より流るなり山野より山の皆雪中とついでと蹴蹴  
して腰とめろと持せり最木弓本夫と用也又ブスといひて  
熊鹿と採る矢は塗る所乃毒藥ハイケこと云草の根と蜂  
とことあつて制表せし物なりとぞ但し腥膻臍へは毒と用と  
為家卿の奇也

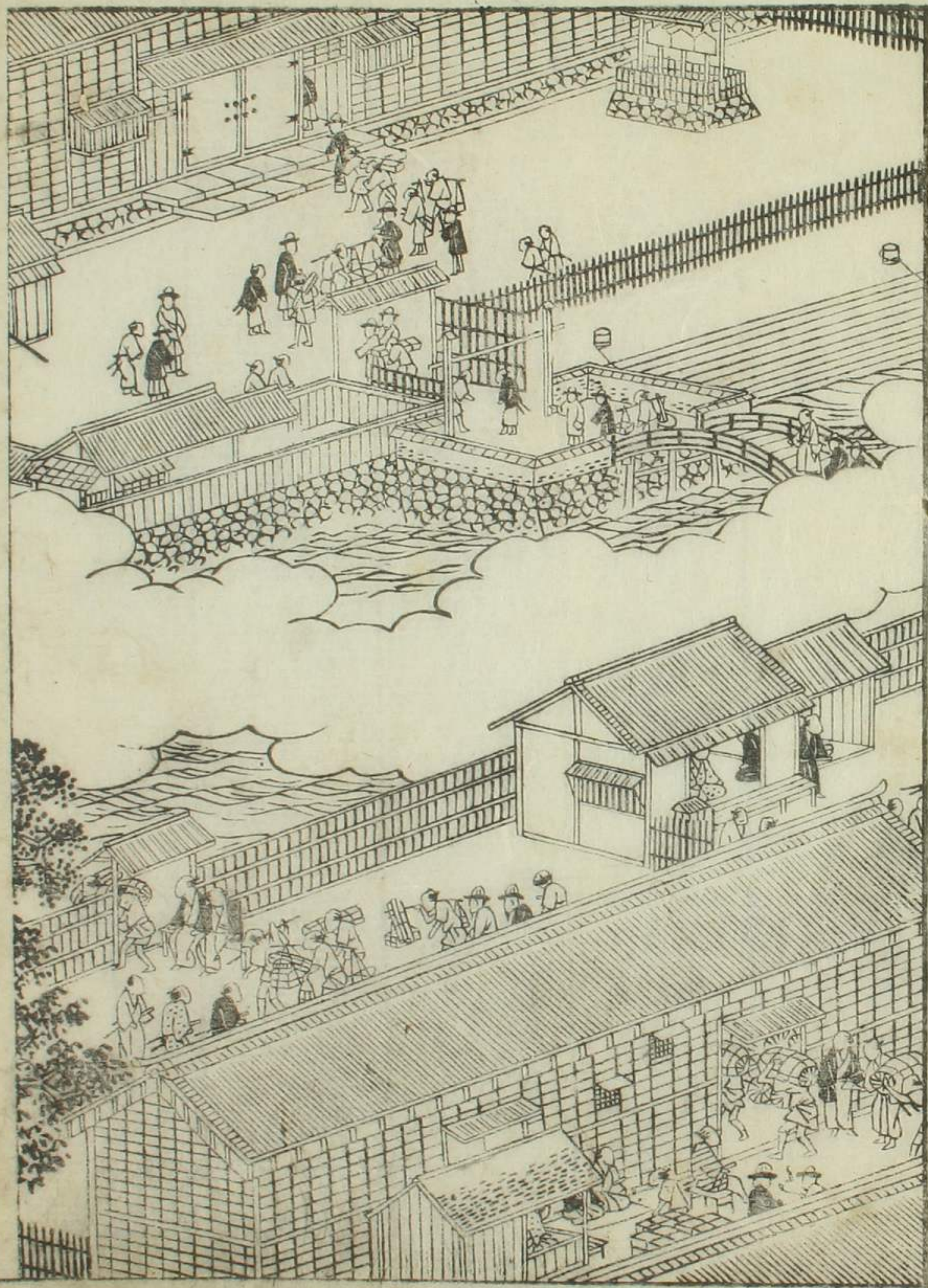
又紹巴の發句よ  
春の夜やるぞりことふくそ月の  
ところばことふくそり月の未何とも分明と知物なく  
傳寫に來りりの序を以てことふくそ月の圖と

十二卷  
木の皮を巻きて他より白く絶えこと竹色と帯くる藤の  
蔓のてこと木のうりこと物長一尺二寸とつりうり



按どるは是ヨサよりのくぐり彼池の笛なりしや子ゆを合く空  
向てふことらげ其邊の月影と曇らせて渾捕しける又一説よ  
山中海邊など出るもの落るる本の葉と拾ひてことくこと巻  
て是は吹くに實は笛の音吹出して秋情と催はせと并りこと  
○俗傳よ義經蝦夷よりりのこと虚實とどつたことばこと  
正説なり海濱よ辨慶寄れ名とらり又清朝ハ清和の齋と云  
し昂義經蝦夷より傳(越)しけるは證とことばことばことば  
しゆりり 蝦夷より 鞋靴の近り

### ○異國產物



長寄唐屋敷  
ながせとうやぢ

新地御藏  
しんちごくら

大関秀吉公の時より泉加塚浦(着る)と其後肥前平戸に移元龜  
 のゆり長等(改)りて今(終)ること(地)ハ元来山中(り)  
 と玉の浦深江と(切)開きて今(萬)家敏系(の)湊(と)いふ(唐)船  
 ハ南京北京ホクチウチヤクチウ其外惣(一)年(十三)艘(を)来(せ)し  
 藥種(絹)布(破)糖(紙)器(物)其(余)云(盡)一(が)野(茂)深(堀)西(戸)の(上)所  
 遠(見)の(目)鏡(を)居(て)凡(海)上(四十)里(許)と(見)通(入)船(の)影(と)見(さ)べ(追)  
 播(を)立(て)官(聽)註(進)一(船)の(近)げ(と)見(れ)大(通)詞(小)通(詞)其(外)官  
 人(船)を(飛)を(せ)て(是)と(迎)唐(船)を(乗)移(り)御(朱)印(を)の(檢)校(と)遠  
 て(着)岸(荷)揚(を)催(ら)上(荷)船(數)艘(と)出(新)地(御)藏(納)む(は)着(揚)  
 終(も)不(さ)揚(と)云(は)り(是)は(船)中(に)お(と)り(て)本(邦)乃(船)  
 玉(等)一(官)人(の)姿(大)る(像)と(お)る(其)像(以)長(壽)の(寺)に(納)け  
 納(る)其(行)装(甚)い(う)先(り)登(り)挑(灯)と(真)先(に)照(ら)し(け)り(て)

鉦(を)ら(ら)一(捧)と(振)り(て)踊(躍)を(人)是(と)國(の)像(船)ハ(梅)島(と)り  
 所(に)は(る)唐(人)屋(敷)へ(入)て(無)事(着)の(加)賀(妻)と(設)け(は)  
 時(丸)山(町)奇(合)町(の)遊(女)り(ま)り(客)と(定)めて(餐)食(を)は(後)出(船)  
 臨(んで)御(定)法(の)御(渡)一(物) 煎(海)軍 昆(布) 于(飽) 紙 傘  
 ぬ(る)物 ぶ(の)鱈 茯苓 其(外)小(間)物(數)品(或)ハ(時)の(好)し(物)に(せ)  
 ら(ふ)又(唐)物(ハ)官(聽)御(拂)物(と)り(古)格(の)商(人)入(札)て(是)と(配)分

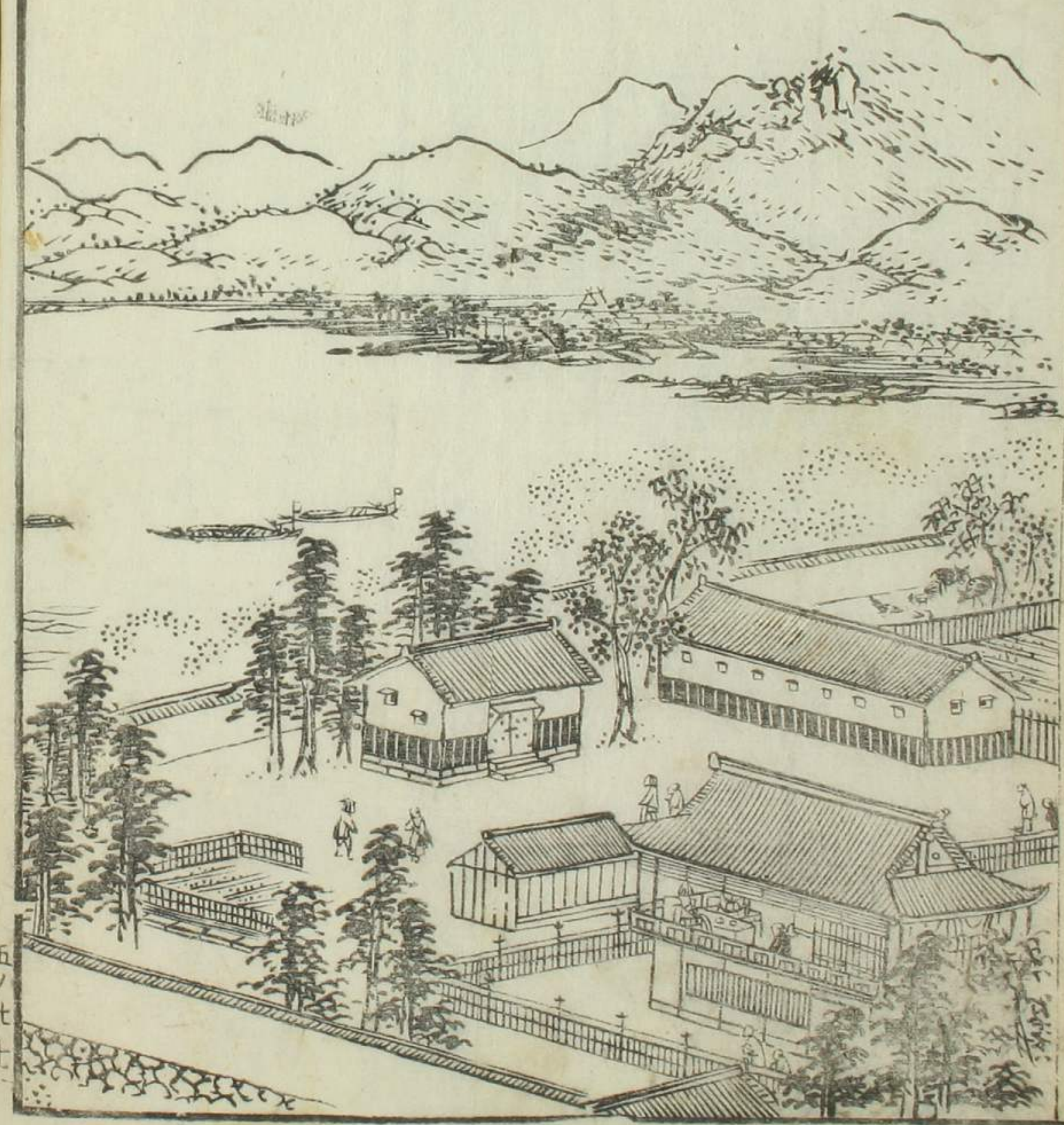
○阿蘭陀船

是(毎)年(七)月(比)入(津)と(同)く(遠)見(より)注(進)り(れ)去(年)渡(り)の(紅)  
 毛(カ)ビ(タ)ン 又(大)通(詞)小(通)詞(官)者(附)添(ひ)飛(船)二(艘)播(を)立(て)漕(出)  
 一(元)船(乗)移(り)御(朱)印(等)檢(校)と(て)漕(戻)る(其)跡(を)て(元)船  
 ハ(石)火(失)と(發)事(九)つ(は)勢(ひ)に(引)船(を)ま(り)て(決)才(は)船(を)  
 今(西)戸(平)戸(町)と(所)御(番)所(乃)む(か)し(り)て(石)火(失)

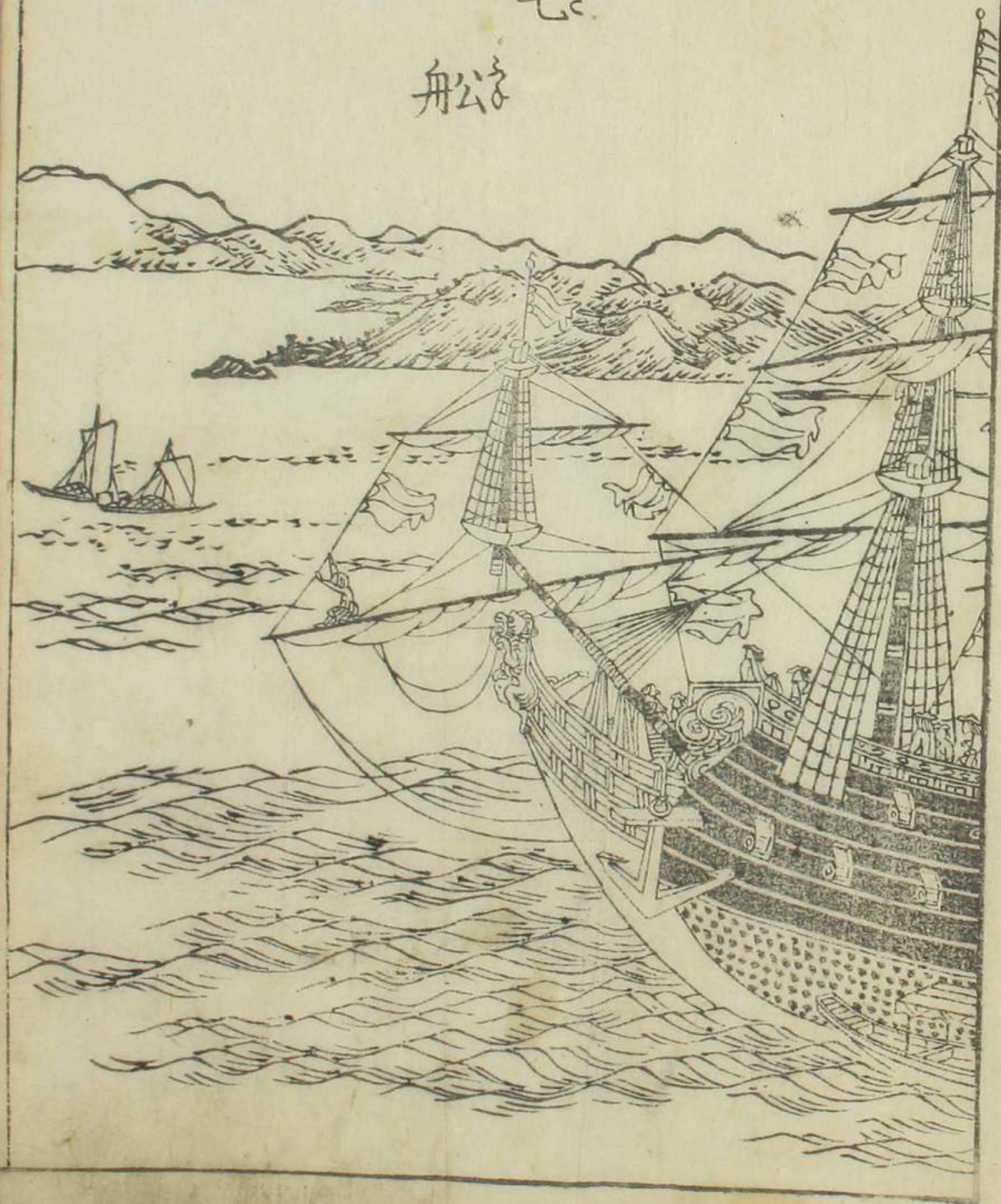
津 船 紅  
入 毛



敷 毛 島 同  
家 紅 出



紅毛船



と發事七つ宛出島の渡り今又九つと嘗か一は時船は播と之れ  
 出島屋敷も同じく堅る是と播合と云ふは放く音樂有る  
 其音妙なるこれより礎とある一又石火火を發と事十八として  
 以時黒烟空中は満ちて暫時船と見ゆる事なり船中ハ其烟の  
 間は四十八の帆と悉く卷上十所は旗と立てと云々裝飾一廻り  
 次第は消るる所更は造りなると云々其花美眼と奪ふ許其ど  
 見事なりかくてえ船のカビタシ小舟は棄てて出島より之れを  
 紅毛屋敷前年のカビタシ從者其外持女などはほくそい是と  
 疋ハ入もてさ事と催となり荷八同く薬種小間物類他國の珠  
 器ども是と揚るる九十四日許なり本邦より渡り物ハ先銅等紙  
 類其外器物等と賜り毎年九月十九日と前年のカビタシの發船  
 と相定る當年のカビタシと殆ど正月十五日ハ貢獻の物と持て  
 江戸は趣き四五月の比長寄より又新船入津と相待り

ちをけ編のち乃とくさふそあ〜おまのち  
 け〜ん

寛政十家、ちの〜、若松、那波に  
 通〜

畫圖 法橋關月 關

日本山海名物圖會 長谷川光信画 全五冊

今浪細は仕藝漢人の餘りて其精巧あり有馬細工の奇巧あり  
 凡山川海陸の産物と画圖より其行程と加へ名産圖會とあり  
 どせ足りしむ〜よせの室とすとくし書



寛政十一己未年正月發行

吉田松林堂

梶木町渡邊筋

播磨屋幸兵衛

浪華書林

心齋橋南久太郎町

鹽屋長兵衛

同

鹽屋卯兵衛

7



